

Title	田中大秀稿本 土佐日記解(続)
Author(s)	長谷川, 信好
Citation	大阪外国語大学学報. 20 p.345-p.357
Issue Date	1968-12-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80341">https://hdl.handle.net/11094/80341</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

田中大秀稿本

土佐日記解(続)

長谷川信好

からうた声にあけていひけり倭歌あるしもまらうともこと人もいひあへり唐歌はこれにえかゝすやまとうたあるしの守のよめりける  
都いてゝ君にあはむとこしものを来しかひもなく別ぬるかなとなむ有ければかへる前の守のよめる 白妙の浪路をとほく行かひて我に似へきは誰ならなくにこと人人のもの有けれとさかしきもなかるへし

○からうた」から歌ハ詩を云り。此日の興の意を作れるなるべし。桐壺<sup>十六丁</sup>にもろこしうたトアリ。

古詩を誦たるにあらぬ事唐歌はえかゝずと有にしろべし。(附箋)加羅とは任那国の旧名にて崇神天皇の御代に外国の始て参りしは此国なり故西方の諸国の大名となりて三韓をも漢国をも皆加羅と云なり欽明紀<sup>二十一年</sup>に惣名を任那といひ別ては十国なるよし云中に加羅国とあるは旧名を遺たる一國也(加良の事記伝三十の六十七丁ウ分注ニ委)○声に揚て云けり

フ、虫のこと声にたてゝはなかねとも泪のみこそ下になかるれ此に同 秋風に声を帆に上て

くる雁は。は唯声を高く詠上るなるべし。歌を云とは今世は不云と古今の序に歌を云てぞ慰めけるとあり。○やまと歌」宇多と云義は師の石上私淑言<sup>上初丁</sup>に委説れたり。さて御国の歌を

やまと歌とは云まじき理なれどもそは<sup>皇居翁古今集卷一打聞初丁師の記伝一に日本書紀とある題号に就て云れたる意に従て云つ</sup>當時もはら詩行は

れて朝廷にも文人を召給ひて時々御会<sup>有</sup>ければ其に對へて万葉にも日本歌といひ又唐歌に拘はらぬにも云習て古今和歌集など標題し伊勢物語にもやまと歌にかゝれりと云り。此は上に唐歌はと

云る語もあれば倭歌と云れしなり<sup>爰を只うたとのみ云</sup>○あるしも」は新司にて館の主人なり。ある

じとは家に在<sup>アツタ</sup>主の義なるべしと谷川氏云り。主の事は下<sup>日</sup>に云べし○まらうとも」は前司紀大人

なり。客は他の人の稀に來たるにて元まれ人と云を音便にまらうとと云なり。勢語<sup>六十</sup>藤原良

近といふ人をなんまらうととぞねにて其日はあるじまうけしたりけり。後撰雜一、人のおやの題詞

にまらうとあるじ酒あまた度の後云々。仏足石の歌に麻良比止。和名抄に玄蕃寮を保宇之萬比止

乃豆加佐とあり。○こと人も云あへり<sup>附者本此下にけり</sup>前司新司の外の介掾目など客方なるも主方

なるも人々多かるべし。○からうたは是にえかゝす<sup>え字附素はと有</sup>得<sup>は誤なるべし</sup>不書此云々不為と云類は俗

にようせぬと云り。下にえいはずえのますなど多かり記伝<sup>二十八</sup>に委云れたり。得かゝずと

鈴木氏は是に不書故は詩は倭文に書入ては着なく宜からねばなりと云へれき。猶按にをとめ巻丁に夕霧君入博士才人とも召てふみ作らせ給ふ云々おほとこの源の御は更なり親めきて哀なる事さへ勝たるを涙落して誦し駭しかと女のえしらぬ事まねふは憎き事をとうたてあれば漏しつとある同じ心延も有べし。○やまと歌主の守のよめりける歌を讀と云又謡ふ詠むるなと云義師私淑言八卷三十に委説れたり。○歌都出て君に逢むとこし物を来しかひもなく別ぬる哉。初句云々の意輕く見て二句の下に置いて心得べし。(ぬる哉とは過去し詞なれば御杖云別後ならでは用ひぬ詞なれば既に廿一日戌時門出すと有か別にて今日は対坐せられても別後なる故ぬるとよまれたりと云り。こは余さう過たること也。今別るゝに定たることなれば改て別たる意によむも何ぞ妨あらんや。——ノ頭注全体ヲ粹デ圓ミソノ右肩ニ「箋ノ方」トアリテ次ノ如キ附箋アリ。○ぬる哉は既に別れし意なれば此に叶はざるがごとし。こは後撰春に、前栽に紅梅を植て又の春おそく咲ければ藤原やとちかく移して植しかひもなく待遠にのみにほふ花かなとよめるごとし。此詞書に咲ければとあれど未咲なり歌ににはふ花哉とあれど未咲よしなり。猶かかるたぐひ多かり。一首の意は君に逢て相語合奉らんと樂しみ思て都を出て此に來待りし物を君は今京に歸赴給へば唯此昨今日逢奉るのみにて遙々難路を経て慕来しかひもなく別ぬる事哉さても御余波惜うこそさふらへとなり。是は紀大人當時名高き歌人なれば殊に慕はしくせられしにも有べし。○となむ有ければ備前の守のよめる扶類本此もよめり(かゝる所詞を少しかへて書例なり、三杖可考)前司紀大人の反歌なり。○白妙の「白妙は元絹布類を云言なるを此頃よりは絹布によらず白しと云言と成れり衣と係る枕詞の事古今雜に、わたつみのかさしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路島山。(五十槻翁信の万録八打細の考の下に白妙敷妙の妙を布帛の惣称としては白妙の雪敷妙の妹など続けたる意通かたしと云はれたれど従がたし。○浪路を遠くゆきかひて」は京を本として往反を云り。万葉十二丁一に、殺目山往反道乃春霞云々古今哀に、在原飯そめのゆきかひ路とぞ思とし今は限の門出なりけり。飛かふのかふも同じ下正月九(貫之集賀歌にへたか年の数とかはみむゆきかひて千鳥鳴なる浜の真砂を)○我に似へきは」は言八衢に着似干見居等の詞る字を添たるは後の定にて古くは第二音いきにひみるより切る詞を受る辞を用たりとあり。○誰ならなくに」は我に肖給へと云意にて我に似給ふべきは君ぞと云るなり。誰ならなくにとは他人君ぞと云意を直に不指付て髣髴に云詞なり。即新司を指て云り。貫之集八十延喜四年九月法皇御六十賀年毎に生添竹の世々を経てたせぬ色を誰とかは見む此歌伊勢集十三丁には、ある所に此宮の御裳着の歌とも竹多かる処と有て第四句かはらぬ色をとあり猶新古今(新古今賀に延喜御時屏玉靖日記解環中一に西宮左大臣左身上をのみする日記には入まじき事なれども悲しと思奉しも誰ならねば記置なりとあり是は自己を指せり(古恋ニふかやふ、恋死は誰か名はたゝじ世の中つねなきものと云は成すとも。貫之集賀歌へ誰年の数とか云む往反し千鳥鳴なり浜の真砂を、拾遺長歌兼家公、云々九重の其中に、いつき居しも言出しも誰ならなくに云々は田融帝を太子とし奉発言して天王とせしよしを讀給ふなり)○一首の意は君も今遠き海路を此に來給ひぬ。是は係歌の意を得て反歌の意に含るなり吾も艱難目を見て此に來て今歸る事なり。吾は此任無障事竟待りぬ。君も吾如く故障なく秋満て歸給ふべしと言寿たる意なり。既に斯注し置しを昌胤抄に風波の難を凌來て安く歸都する我は四年の間無事にてつとむ。我に可似は誰にてあらん、そなたなる

べしと云意と大方同意に落たり。○こと人のも有けれど」は上にこと人も云あへりとする其歌どもなり。○さかしきもなかるへし」とは珍しく一節ある歌もなければ不記となり。古事記に佐加志亮とある。伝<sup>十一</sup>のに佐加志は愚なる反にて誉たる言なりとて、此の文を引て歌のよきを云りとあり。古今序に或は花をこふとて云々あるは月を思とて云々心々を見給ひてさかしおろかなりとしろしめしけむとあり。

とかくいひてさきの守も今のも諸ともにおりて今のあるしもさきのも手とりかはして酔ことに心よけなることとして出にけり

○とかく云て」とかくの事は上廿一日条に云つ。詩歌の外にも猶種々の事の有しを斯云て略るなり。○前の守も今のも」守の下も字脱せ是は前司の方の女の記なれば前司を先に書ましかれど此は守の館を退出らるゝ時なれば、帰る前司を先に云べき事論なし。○諸共におりて」は前司は座を起て退出らるゝを今の守は其を送にとて起て伴ひ階を下らるゝなり。○今の主も前のも」附為本に、さきのも今のもト有はわろし。上には前の守もといひ今のもと云。此には今の主もと云前のもと言を省て対句に云る文の調甚めでたし。○手取かはして」は主の親しみて別惜みて為らるゝ態なれば今の主を先に云り。能々味べし。○あひことに」は醉言なり。○心よけなることとして出にけり」は昌胤抄に、祝言など云て云々と云り。是は前司新司諸共に寿言など云かはして別出らるゝなり。上なる前司の反歌も寿言なる事此にても柄しかし。○こととして」は下<sup>正九</sup>にも独言にしてとあり。竹取物語に<sup>竜首玉の段三</sup>に、をぢなきこととする舟人<sup>御狩の段四</sup>に、いはれぬことなし給ひそなど云と云うべきを為と云るなり。拾遺賀順、老ぬれば同じことこそせられけり君はちよませ云々(三月八日書)

廿七日大津より浦戸をさして漕いつ。

○大津よりは廿一日官舎を出られしより六日の間大津に在て今日始めて船出せらるゝなり。○浦戸をさして漕出」とは今夜其所まで往到らんと志さるゝなり。

かくするうちにみやこにて生たりし女児国にてにはかにうせにしかはこのころのいてたちいそきを見れと何事もいはず京<sup>ミヤコ</sup>にしかへるにをんなこのなきことのみぞ悲しみこふるある人々もえたへす此あひたに或人の書て出せるうた

都へとおもふに物のかなしきはかへらぬ人のあれはなりけり 又あるときにはあるものと忘つゝなほなき人をいつらととふそなしかりける

○かくするうちに」<sup>するを附素</sup>此段ふとは此船出に成て女児の死たる由に聞ゆめりクホノスサヒ内にもとも字を添れば過去し事と聞ゆ。(されどいたく程へし事にはあらざめり。たとへば此冬

か此月に入ての死去なるべし。)若は脱せるにもあらんか。<sup>故姑もを</sup>かくとは今京へ上らるゝ事を指せり。其嬉しき内にも意なり。今日国を出離らるゝ際と成て殊に思出らるゝなり。そは亡骸などを此国に蔵に置きたればなるべし。(詔詞解ニ<sup>廿七</sup>此六年乃内乎挾賜試賜而云々内字間の誤には非ざるかと云れたれど此と同じければ誤には非ざるべし)○京にて」凡て諸本京字、都字

を書る所数しらず多かるを悉<sup>ミタ</sup>皆みやこと読べし。京字典に「都京居<sup>ハキョクイノ</sup>郷切<sup>キョクイ</sup>音驚天子所<sup>ミヤコ</sup>居日ニ京

師一京ハ大也師ハ集也。天子ノ之居必以衆大ノ之辭一言之都東徒切音聞広韻ニ天子所宮曰レ都あり。伊勢物語ニ今本に奈良の京ははなれ此京は人の家また定らざりける時に西の京に女有けりとありて字音とキヤウとよみ来つるを古意に皆みやこと読れたるに従べし。万葉一丁一太敷為京乎置而とあるもみやことよめり。又詔詞ニノ十みやことも訓り。みやことは天皇の宮所敷給に左京職の京字美佐止と訓り。和名鈔されども凡てみやこと云習へれば此もみさとと訓てはわろし。○生たりし女兒國にて」は附素本こいにしてト有ハク「こい」ノ二字ニ見にノ重点ヲし此土佐國に於てと云事なり。○にはかにうせにしかは」にはかにとは病の漸々に催したるにあらぬ由也。後撰秋にはかにも風の涼しく成ぬるか秋立日とはうべも云けり。古今哀詞書に、女にはかにやまひをしていとよわく成にける時云々卒爾に病て亡にしの意なり。御杖も宇治拾遺に載たるにとかく煩ひてとあるは常に病身なりし由に聞ゆ。(倭忽記伝十八の四十七丁、廿三の俄牛何切広韻ニ統紀宝龜元年称徳天皇崩御の際に詔に事卒爾有ニ依云々卒爾をニハカと訓り。万葉十六に将死命爾波可爾成奴)○此頃の出立いそきを見れと」何事ニマレ用意シ營ナムヲいそくと云いそしきさを又いそかしなど云同言なり。師一詔詞解云伊蘇志ハ勅字ヲ書テ古書ニ多言ナリいそハいさをノ約レルニテいさをしト同と云たり。新古今秋下立田姫今はの比の秋風に時雨を降せて染る事を営むよし也と師云れたり。大和物語に亭子院御賀の前日俊子に十月朔日の日此物いそき給ひける人の許におこせたりけるへ千々の色にいそきし秋は過にけり今は時雨に何を染ましとあり。歳暮の歌どもに春のいそきと読る歌皆此意なり。猶下正月にいそきてと有下可考。京に帰らるゝ用意の事繁き中にもと云事にて即帰京を悦ぶ中ながら此事をえ忘れられぬなり。(イソキイソシム)○何事もえいはすに字附素本は其動に言加ふべき事共もあれど悲歎にのみ沈たるを云是は貫之主並室などの上を云依て補は其動に言加ふべき事共もあれど悲歎にのみ沈たるを云是は貫之主並室などの上を云にて此記者の事にて悲しと御杖云り。えいはれすと附主本にあるは此記者の主の事を云由に聞ゆれど此は次にも悲み恋るなどあれば此のみ主の事としては不叶。女に託ては書記たれど時々は実の言まじれり。此も然なりと知べし。○みやこに帰るに」は下のに字の上に此嬉さにつけてもと云事を加へて心得べし。○をんな子のなきことのみそ悲しみこふる」ことは附のみは他事なく唯其一筋に限れる由なり。○悲しむ」は何にまれ身に入ばかり深く心の係るをいふ。古事記玉垣宮保尾古王を撃時不得忍愛とある下に加那斯と云言は悲哀む意愛憐む意恋慕ふ意など皆兼て其弟后を天皇不得忍愛とある下に加那斯と云言は悲哀む意愛憐む意恋慕ふ意など皆兼て如此云に不得忍の意も自在り。万葉四丁に宮爾行児乎真悲美云々と伝に(古事記伝のことか——注者)云れたるは愛しむ筋の方を云れたるなり。又古今序に、露を悲しむといひ大歌所の歌にへみちのくは何処はあれど塩竈の浦榜舟の繩手悲しもと読るは樂しと思心の深き由なり。猶下九日の面白○こふる」は人情の切実を云へは乞来る義なるべしと谷川氏云り。○ある人々もえたへす」ある人々は紀大人の前に居合たる人々にて父母のみならず、其外の人々も悲に不堪となり。竹取物語天羽衣段に望月の明さを十合たる計にて在人の毛孔さへ見ゆる程なりとあるに同じ。○此間に正廿六日ある人の」は或人のなり。○書て出せる歌」とは涙に咽て物も云れぬが故なる事を思はせられたるなりと御杖の説るさも有べし。○歌都へと思ふに物のつきて」悲きは帰らぬ人のあればなりけり」に字は為本によりて改つ。抄素も、妙をもの意とあり。此にはものをと云に近

し玉ツクヲ。新古今に、庭面はまだかわかぬ爾夕立のそらさりげなく澄る月哉。今都へ帰らんと思五廿丁へばいと嬉しかるべき時なるに斯物悲きはいかなる故ぞとおもへば、京にて生て此国に連来し女児が諸共に帰らぬ故にて有ぞとなり。物の「」の字有も無も同事にて物かなしき也。物恋し物哀などの物に同じ。凡に云言なり。此等の物は心をさせり。宇治拾遺にはおもふにつけてとあ ○又或時には歌あるものと忘つゝ猶なき人をいつらととふそ悲かりける」素本にいつく類いつらは俗にドコニ居ユルソなど云意なり。大和物語〔空白〕に良少将法師の昔衣の歌いつらと問て持て来し人を世界に求めどなしとあり。をはナルものをの意なり玉緒五のつゝは幾度ももの意にて忘ては問々する由なり。上句を三二一と次第で心得べし。亡人なる事を忘て猶世に在人と思ていくたびもく問つそれが悲しき事そとなり。猶は初句の上に有意なり。桐壺八丁に更衣亡給ひてむなしき御からを見るく猶おはするものと思ふがいとかなければ灰に成給はんを見奉りて、今は亡人とひたぶるに思なりなんとさかしまの給ひつれど云々。又大和物語〔空白〕に男限なく思ける女を男を深く思ふ置て他の国へいきたりけり。いつしかと待程にしにぬ男死しと云て来たりければへ今こむと云て別し人なれば限ときけど猶ぞまたるゝなり 女女の歌。如此る意延今もある事なり。○此段の事宇治拾遺二十四丁に記せるは趣少異なり。今は昔貫之が土佐守に成て下て在ける程に任はてゝの年七八計の子の得も不云をかしげなるを限なく悲しうしけるがとかく煩て亡にければ泣惑ひて病付ばかり思焦るゝ程に月頃に成ぬればかくてのみ有べき事は、上なんと思ふにちこのこゝにて何と有しはやなど思出られていみじう悲しかりければ柱に書付けるへみやこへと思ふにつけて云々と書附たりける歌なん今まで有ける」とあり。美木云、此日記に違へる事もあるは後に聞伝へて書し物なればなり。歌も即貫之が歌とすれど今は自身のとせず。凡てを他のさまにかけるも多かれば何れにても有なんと注に云り。

といひけるあひたにかこの崎といふ所にいたるに守のはらから又こと人これかれ酒なにともて追来て磯におりゐてさけのみ酔て別かたきことをいふかみの館のひとゝの。中に此来たる人々を心あるやうにはいはれほのめく

○と云ける間に」は此亡児の歎にて舟の進みたりしも不覺りし意なりと御杖云り。(さて斯さまに云々する間にといふ事次々甚多し。又稀に保孚とも云り。古事記黄泉に伊邪那美命云々白而還入其殿内ニ之間甚久難待とある間字阿比陀と云むも悪からねど猶雷孚と訓べし。然訓る例は、万葉十一丁大船ニ真帆繁ニ拔榜間極太恋年ニ在如何。三ノ句コグホドモと訓り。)(附箋)景本廿二丁此間にと云は当時中間事を起す詞にて必其あひたを指には非ず。今も悲恋間にと云にてもなく人々のえたへぬ間にと云にも非ざる也云々ある引つどへて知べし。「家集にも、源公忠朝臣の許に此歌をやりける。此間に病おもく成にけりとあり。」按に中昔の頃より去程にと云る発語あるに似たり。是も上を受ける心なる物からさあるほどにと其時をしかと差には非ぬが如し。いと軽きはさて、かくてなど云に通へり云々。さはいへ其間をきとさしていはんも元来此言の本意ならんには玉々いかであらざらん云々。今の俗文にも大切品に候間心を用られよ又云々承候間御尋申入など云。いにしへ故の語はかくあれはの略にて今かるがゆゑにと説に同意なる物から又かくて、さて

など云べきいとかるき発語にも故と違ふ事少からぬは此間に、去程に又候間なども皆似たる物にて今古おしなべて大やうかはるべからぬ言語の自然なりかし。○鹿兒の崎地名考可見。○い。たる。に附本に此四字無ても聞えはすれどなき他本は脱せるなり。○守のはらから」は新司の兄弟なり。

はらからとは（落凹解ニ委云べし）からは族也。はらは腹にて同母兄弟を云名なるべし。然を落凹（窪）二のに女君のに憑方なくはらからとても相思たる事なく云々とあるのは異母兄弟なり。

○又こと人是かれは新司の弟などに属官の人などもたぐひて来たるなるべし。○酒なにと素にと字清べし。などと云は此略言なり。云故にを略又音便にと物一二を挙て余の物を略云語なり。此に略るは肴やうの物なるべし。さて此言他は皆など、云れば此もに字は無かりしにも有べけれど抄

に有に從つ。師の木枯森碑に抑此森者彼六帖在乎始登為弓後撰集在歎伎之歌又定家乃郷之下露乃言之葉何登云々と書れたり。○もておひきて」は賁て追来てなり。追来とは慕来るにて俗に跡追ともあとおはへとも云り。万葉九の処女墓に血沼壮士其夜夢見取次寸追去祁礼婆云々とあり。古事

記に伊邪那欲相見其妹伊邪那美命追往黄泉国。万四十三長うたに、吾背子が行のまに／＼將追跡者千たびおもへど手弱女の吾身にしあれば云々。○磯におりゐて」は舟なりし人に付て云言なり。後に舟に乘なむとすとあり。磯の事は下廿二に云べし。△○磯とは古事記倭建命の歌に

「浜つ千鳥よは不行磯伝」とある。伝廿九に浜と磯とを對へて云事は先浜も磯も共に水際を云名にて同が如なれど精く云へば聊差有。浜は陸方の名、磯は水方の名なり。万葉十五に、玉の浦に舟を止て浜備より浦磯をみつ云々。是を正しく浜と磯とを別て読りと有。然どもこゝは下

居てとあれば水無き陸なり。既に當時其差別なく成れりしものなり。磯の事は下廿二〇さて舟より陸に転を下と云り。（下三十に宜しき所に下てゆく。竹取物語段に舟よりおりて、解二ノ三十二丁可考。竜玉段、明石浜の処に松原に御建敷ておろし奉るとあり。解三ノ四十五丁。西行撰集抄三四道法しが伝に舟より飛下て浜にあがりて云々。）殿上花見卷上東門院住吉より歸給ふ処に御舟より下

させ給ひて上らせ給へば、都には云々とあり。今世人は陸に登りてなど云はわろし。舟路の記など書むには心得置べし。或人文明五年八月富士山見に駿河へ行日記に十五日大江伊伊セと云処より舟に乘いらこの渡とてすさまじき処をこし侍る云々十六日舟よりあがりて瀉浜とて浪の荒々しき

処をこえ侍に云々と書り。海川は渡と云べきをこし、こえなど云るもわろし。当時既に誤れり。○酒飲ゑひて」此一句他本は脱せるなり。附本に從て補つ。混て入れるに非ず。さかしらに加たるに非ず。若近世人の私に加なんには酒汲交しなど書べきを飲醉と有にても古く正しきを知べし。伊勢物語一段に、狩はねんごろにもせで酒をのみ飲つ、（夜ひとよ酒のみし遊て酒ノム目ニ云ニテ、シュエ、此酒をのみてんとて、古今旅うた部此事を、天の川といふ川のほとりにおりて酒などのみけるついでに。雉ニも、同酒のみ物がたりして。大和物語（空白）に、よひより酒のみなどすとあり。○別かたき事を云」は別の歌よまんとするさまを催すなり。○守の館の人々の中に此来たる類ニ從補人々を心あるやうには諸ニはれほのめく（来たるは類本に依て加を諸本くと有はこゝに不叶。は字諸本に依て加）此に心あると云へるは物の哀知たる人、心あらん人にみせばや津国の云々のたぐひに、心あるといふ意にあらで、紀大人を慕ふ心の深き由

なるべし。△心有やうに丁四景木云、此心有は風雅の心なり云々今も歌よむ人とは心有人と云めり。上安ノリを心ある者と云るは道義の有心也云々ト云り。▽△大秀云、館の人々の中にといへる、誠に歌よむ人々といふことゝ聞ゆ。景木主の説に従べし。▽○いはれは紀大人に云ゝるゝなり。○ほのめくとは紀大人の状を記者云なり。此追来し人々に対して、其人々の懇切なるを悦ばるゝ由など指付て、慥に言に出ては云れねど紀大人の物云執成ぶり此人々の懇切なるを悦ばるゝ様子のかつゝ顕て見ゆるなり、と記者の云るなり、やうにと云ゝほのめくと云るに掲カ炳アキラカし。○ほのめく」のほのめくはホノメク勢堀と云に同じく、明ならず慥ならぬ意なり。めくは様子を云り。六帖ニに、かげろふの人目計はほのめきて不來夜数多爾成にけるかな。△○ほのめく景木説によりて按に是は彼心有人々の様子を云にて歌よまむと為るさまの且々見ゆるよしなり。歌よむ人々ぞと紀氏にいはるゝ也

かく別かたくいひつゝ。彼人々のくちあみも諸もちにて此海辺にて荷なひ出せる歌

をしとおもふ人やとまると蘆鴨のうちむれてこそ我は来にけれと有ければいいといたくめて行人のよめりける

さをさせとそこひしられぬわたつみのふかきころを君に見るかな

○かく別難くいひつゝ。鈴朱に従改、諸てかくとは上に別難き事を云と有を指て云り。

○彼人々の口網も諸持妙附に従改、抄もろにて此海辺にて荷ひ出せる歌「くちあみは玉勝間十一丁

に、土左日記に云々とあり。遠江国人金原清方が云く、今世に海人のしぐさに引網と云有て、其

に口網奥網と云あり。其口網は広さ六七尺計長さは五六十丈も有を海中へ延置て魚を取、そを引上る時には海人等こゝら並立て荷なひ出すなり。是ならむと云り。さも有べし。歌作ことの口重きを戯に彼口網の重くてこゝらの人のかゝりて荷なひ出すに譬云たりけむと云給たり。又越中国蟹

瀬篤好が口網とは諸持と云む料に所柄なる網をそへて綾に云るなるべし。今俗諺に口車にのすと云類にて、此も口網を持出て文を成せるなりと云る宜し。按に諸持といひ荷なふと云は、此歌今追来し人皆の意を一首に作るにて、一人にて作出たるには非で打会語合て唯一人の歌には非ざる由なり。猶甚いたくめてゝの下に云べし。○歌をしと思ふ人やとまると芦鴨の打群てこそ我は来に

けれ」季吟翁云、初句は別を惜と云に鴛を云そへたるにや。拾遺別にも△別路ををしとそ思劍羽オモフツ本の

に身をよりくたくちのみしとよめり。○芦鴨」は万三十五丁君にこひいたもすべなし芦鶴

之哭耳所泣朝夕にして）芦辺の鴨なり（御杖云、芦鴨はあしたつと同じく芦辺に常をる物なればなる（以下四字不詳）芦鶴芦鴨など皆其住所の物もて名とせりと解に云り。）をしと云から芦鴨

と云て打群てといはん枕詞とせしなりと云れたり。小馬命婦集に此男日くるれば出でいにけり。妹同意に敷て妹のへ夕されば一番にて往君ををしとはいかゝ思はざるべき。反へ忙ぬればをしともい云おこせたる

はす池にすむ忘るゝかもと我ぞ知べき。惜を鴛に云よせ鴛と云よ此歌ども此と同じ意延なり。然る

を考証標春海翁の説に此日記歌惜に鴛を云寄ゝたるには非ず」と云れしは、をしは表の惜の意、芦鴨は打群の枕詞とのみ見よとなるべし。万葉の頃ならんにはさる事なめれど此比と成ては如此趣

意に作る甚多し。（貫之集可考。恋の歌の中に、△沈ゝとも泛ゝとも猶水底に名ををし鳥の友に



こそ思へとあり。古今恋三、池に住ををし鳥の云々。重之集、鴨首草こひにやるとて、冬の池の  
の同友には遊べどもをしとな云そ鴨の首皮。大秀は北村翁の説に従べし。さて歌の意も此追来  
し人々の総てより云意なり。そは打群てと云るに掲ぐ、我はと云言追来し凡ての人数に係りて  
我等はと云意なり。されば諸持と云へるにも熟く叶ひて聞えたり。一首の意は明らかななり。○と  
いひてありければは、てあの約たなり。云たりければと云に同じ。○甚いたくめでゝは按に  
上に諸持にて荷なひ出せりと有は、欺笑たるにはあらで、人々相談て辛じて調へたるやうに見え  
し故、口重くて疾え作あへざりしよと思はれしに、此哥追来し人々不残の意を一首に演たるに  
て、一人の意もては定べきに非ざれば人々に談合て作出たるが、今此に能叶たれば甚痛く感られ  
しなるべし。○行人のよめりけるは京へ帰行人にて紀大人の答歌なり。○棹させどそこひしら  
れぬわたつみの深き心を君に見る哉考異君をしるさせどは此人々の志を指て思量を兼たり。いせ  
物語卅二段上、隠江に思ふ心をいかでかは舟さす棹のさしてしるべきさしては推量○そこひは師  
説に底とは上にまれ下にまれ横にまれ至極まる処を云り。万葉十五卅四に、安米都知乃曾許比能  
宇良爾と有を知べし。紫式部日記に、そこひも知らず清らなると云るも限もなくと云に同じ。又  
六廿六に、山乃曾伎野之衣寸とある曾伎も極を云て同意なり。曾伎は曾久に云るにて曾久  
とは離放る意なり。遠そく退の曾久なり。斯て其を駄言に曾伎と云は曾伎たる処を云言な  
り。又曾許と云時は許は彼処此処などの処にて曾伎処の意なりと猶委記伝三云れたり。美木主云、  
曾伎は古比の約幾なればそこひとそきと同意なりと云り。○わたつみは海神の名なり。泉居翁の  
説に大綿津見神名義綿は海フナをわたと云は渡ると云ことなり。万葉一に對馬の渡中になどあり  
津は助辞、見は持てふ意なり。又わたつみを只海の事に云は此神の名より転れるなり。故いと上  
代には神名の外にわたつみてふ事は見えず。海をも然云は天津飛鳥の比よりや始りけむ。(万  
三、海若之奧爾持行而)又わたつうみと云はいよく後の僻事なり。延喜式までは只和多都美とのみ  
ありといはれたり。記伝五の卅六師説に津は清て読べし。(のは云々の如の意)大和物語一段に、  
是も内のおほむ客院に参りせ給へる歌わたつみの深き心をおきながら恨なれぬる物にぞ有ける。○一首の意は  
海の深さは棹差て探れども底の限のしられぬが如く、今慕来て別惜む人々の懇切なる志を海に譬  
へて、其許たちの上に海底の甚深きが如き志の程を見る事哉といたく悦ばるゝなり。上に心ある  
様に云れはのめくと云るを此に決定もて結べるなり。下仲満歌の段可考さて此も君と云て追来し人皆へ係  
たるなれば君等の意なり。抄に李白が汪倫に与ふる詩に、桃花潭水深千尺。不レ及汪倫送我情。  
と云るに能叶へりとあり。

といふ間に楫師ものゝあはれもしらておのれし酒をくらひつれば早くいなむとて汐み  
ちぬ風もふきぬべしとさわけは船に乗なむとす

○と云間に「は互に歌読交しなど時を移せるなるべしと御杖云り。○かちとり」挾抄者、挽師、楫師  
など書り。師云楫は今云嶋又加伊の類なり記伝三十の六十二丁○物のあはれもしらで師源語玉小  
云、あはれと云は見る物聞く物触る事に心の感じて出る歎息の声にて、今の俗言にもあゝと云、  
はれと云是なり。あゝとはれと重たる物なり。又あはれを知あはれに不堪など云は、あゝはれと

感ぜらるゝ様を名付てあはれと云物にして云るにて、感べき事には感べき意延を弁知て感をあはれを知とは云なり。物の哀と云も同言にて物とは広く云時に添る言なり。必感べき事に触ても心動かず感こと无を物のあはれ不知と云。无心人とは云なり。後撰集〔空白〕に、或所にて簾の前にかれこれ物語し侍けるを聞て、内より女の声にてあやしう物のあはれ知良なる翁かなと云を聞て、貫之へあはれてふ言にしるしはなけれどもいはではえこそあらぬ物なれ、猶甚委を今は「おおのれし」は、他に對へて分ちたる言ながら、卑めて云言なり。

其由委竹取物語解 此人々互に別難くせられるゝを機取ら心なき者にて酒飲飽たる上は為す態もなければ此人々の上も不顧おのが怨に強なる事云るをいたく憎まるゝなり。し字は助辞ながら大抵下にはし字あり。富士谷成章如此しは俗にサへと云に当れりと云りとぞ。名にしおはゞ殖しうゑば、妻しあればの類なり。○酒をくらひつればつ字為本 飲といふべきをくらひといへるは卑しめ憎て云意也。○はやくいなんとて汐満ぬ風も吹ぬべしとさわげば」は汐も満、順風も吹べき気色にて舟出に便よきを、斯て徒に在は恨き事なり。疾舟に乗給へ漕出してんと催なるべし。万葉一丁に、熟田津に舟乗せんと月までば汐もかなひぬ今はこぎでな。御杖云、汐満ぬと有を思へば汐待がてらに舟を止られたるなるべし。秋成云、風も吹ぬべしは追風を云なるべしと云り。按に○さわぐは喧しく云立又舟よそひなどするにも有べし。伊勢物語隈田川段に、限なく遠くも来にける哉と怍あへるに、渡守はや舟にのれ日もくれぬと云。枕冊子三の卅に主の人の許に「行て長居したる、供なるをこの童など斧の柄も朽ぬべきなめり云々あなわびし煩惱苦惱かな、今は夜半にも成ぬらん云々、雨降ぬべしなど聞へたるも憎し、よき人公達などの供なるこそさやうにてあらね、たゞ人などさぞある数多あらん中にも意延見てぞ率てありくべきとある能似たり。賤しき者はあはれしらで今もかゝるぞかし。○舟に乗なむとす」此言舟に乗に心進まず甚備けれど機取等が云諫に依て為ん方なく船に乗らむとせらるゝ状見るが如し。

此をりにある人々をりふしにつけつゝ唐のうたもときに似つかはしきをいふ又ある人西国なれと甲斐歌なとうたふかくうたふに逢庫の塵もちり空ゆく雲もたゝよひぬとそいふなる

○此をりに「時字又節字度字ををりと訓り。大神宮儀式帳十五に三節祭と有。谷川氏云、時をより

く」とよめればをりは転語なるべしといへり。古今序に片糸のよりく云々に。○ある人々」は在人々にて彼追来し人々なり。此詞上に解つ。○をりふしにつけつゝ」上に此をりにといひ又をりふしにといひ下に時に似つかはしきと云に、つけも似付かしき意なれば、いたづらに言重れりと聞ゆ。此一句無てあらまはが如なれど後に加はりたるにもあらじ。つゝは考諸本とあるつゝにては詩を数首吟じたる由なり。つけては古今序に、心におもふ事をみる物きく物も悪からずにつけて云出せるなりとあるつけに同じ。○からの歌とも諸本の古今序にからの歌とあり。のを添ても除ても其文の詞つきに従て云るなるべし。但彼国にて作れるは唐の歌ともからうたとも云べし。桐壺卷十六には長恨歌をもろこしの歌といへり。皇国人の作れるは唐のとは云べからず。からうたと云ては名目なれば何にてもよろし。○時に似つかはしきをいふ」(妙本には似あは

しきと有は誤か。を字は附素両本に依て補つ。抄本無は落せる也。今日の別のさまに着々しく叶へる古詩を吟たるなり。季吟翁云、唐人の陽関などうたふやうに折に叶たるをうたふ也。清輔朝臣の袋冊子<sup>三</sup>の卅<sup>二</sup>に、俊頼君云折節に叶たる歌を詠はよむには勝れり。先年前齋宮伊勢より飯京の時十訓抄<sup>一</sup>には白河院淀に御<sup>二</sup>御供に候す。淀の渡に御舟付て人々不寝あかす間向の市に郭公一声鳴行万人断腸<sup>三</sup>自<sup>四</sup>御船は女房の声に竊<sup>五</sup>にへ淀の渡のまだ夜深き此歌拾遺夏王生忠見天曆御時御屏風に淀ノ渡する人かける処にへ何方に鳴て行らむ郭公とあり云々と詠したりし臨時めでたかりし者なり。人々感歎して今に難忘云々などある心ばへなるべし。○又ある人<sup>六</sup>は或人詩を吟たる中に又或人倭歌を誦ふなり。○西国なれど<sup>七</sup>附本西のとある詩は時に似着たるを云るに、東国の歌を西国にては似つかぬを断れり。土左は京よりは南海道なれど、東の甲斐国に對て西国と云れしなり。されど歌の意はよく叶たれば誦へるなり。(空蟬卷<sup>七</sup>丁<sup>八</sup>に、空蟬君源君に逢し後物思ふ事を、ひるはながめよるはねざめがちなれば春ならぬこのめもいとなくなげかしきに云々とあるは、へよるはさめひるはながめにくらされて春はこのめもいとなかりけりと云歌を引けるなるを、其時夏、六月斗の事なれば春ならぬと断はれるこゝによく似たり)○甲斐歌などうたふ。諸本いふとあるを附本に從て改つ。たふナル<sup>九</sup>甲斐歌は古今集<sup>十</sup>卷<sup>十一</sup>到大歌所御歌の東部にかひうたへかひがねをさやにも見しけつれなくよこほりふせるさやの中山<sup>十二</sup>風俗歌に甲斐と題して載たり。みしがの下せ字有。け、れなくを再度誦ひやくよこほりふせるさやの中山<sup>十三</sup>反せり。ふせるを太天流とす。古今の異本にこそるくせるなどあるせ字はやとの誤なるべし。(此歌万葉一なる三輪山を云々の歌同意なり)へ甲斐がねをねこし山こし吹風を人にもがもやことつてやらむ<sup>十四</sup>師云此歌京より下り居る国司などのよめるとあり。按に紀大人を甲斐が峰に、楳取を佐夜中山にたぐへ、見しが此がはも哉と同意にて不載。を慕意に、け、れなくは彼国の方言にて心無なればは楳取のあはれしらぬに執成たるなるべし。今一首は風も吹ぬべしと云より思寄たるなり。昔は吹風を人にもかもとよめるに、今は都へ歸其人々に言伝やらん。然は勿いそぎそ暫までよかしと思ふ由に執成せるなるべし。是新任の守に從ふ人々にて都に言伝すべき所々多かるべし。かゝれば西国なれどと断たる外には、いとく此時に似つかはしき歌なりかし。是につけても似つかしかりけむ詩はいかに時に応ひけん、甚ゆかしうこそおほゆれ。(按に棹させどの歌又李白が詩の心をとれるよしをもにははせたるこゝの詞なるべし)○かく誦ふに舟屋形の「舟やかたは和名鈔に、唐韻云篷庫、蓬備二音、和名布奈夜太舟上屋也。釈名云舟上、屋謂之<sup>十五</sup>廬<sup>十六</sup>力居<sup>十七</sup>音<sup>十八</sup>象<sup>十九</sup>廬<sup>二十</sup>含<sup>二十一</sup>也。曾丹集<sup>二十一</sup>六十<sup>二十二</sup>山田守そはつとも今はながめすな舟廬より穂先見ゆめりとよめり。○廬もちりは、ちり諸本に從て補つ。散字なきは廬もたゞよふ此古事は、杜氏通典に漢有<sup>二十三</sup>虞公<sup>二十四</sup>善<sup>二十五</sup>歌<sup>二十六</sup>能<sup>二十七</sup>令<sup>二十八</sup>梁上<sup>二十九</sup>方<sup>三十</sup>に成て本文の義に背けり。必脱せるなり。散木集に川尻に受領の下る船に遊の舟漕<sup>三十一</sup>塵<sup>三十二</sup>起<sup>三十三</sup>と抄に見え、起字事文類聚統集に出せるには動梁塵と有と附<sup>三十四</sup>散木集によせたる形かける處をよめるに引り。起字動字の心を得て散と書れたる歟。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>三十五</sup>湯問<sup>三十六</sup>に誦譚<sup>三十七</sup>誦<sup>三十八</sup>る<sup>三十九</sup>昔<sup>四十</sup>問<sup>四十一</sup>の聲<sup>四十二</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>四十三</sup>湯問<sup>四十四</sup>に誦譚<sup>四十五</sup>誦<sup>四十六</sup>る<sup>四十七</sup>昔<sup>四十八</sup>問<sup>四十九</sup>の聲<sup>五十</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>五十一</sup>湯問<sup>五十二</sup>に誦譚<sup>五十三</sup>誦<sup>五十四</sup>る<sup>五十五</sup>昔<sup>五十六</sup>問<sup>五十七</sup>の聲<sup>五十八</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>五十九</sup>湯問<sup>六十</sup>に誦譚<sup>六十一</sup>誦<sup>六十二</sup>る<sup>六十三</sup>昔<sup>六十四</sup>問<sup>六十五</sup>の聲<sup>六十六</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>六十七</sup>湯問<sup>六十八</sup>に誦譚<sup>六十九</sup>誦<sup>七十</sup>る<sup>七十一</sup>昔<sup>七十二</sup>問<sup>七十三</sup>の聲<sup>七十四</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>七十五</sup>湯問<sup>七十六</sup>に誦譚<sup>七十七</sup>誦<sup>七十八</sup>る<sup>七十九</sup>昔<sup>八十</sup>問<sup>八十一</sup>の聲<sup>八十二</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>八十三</sup>湯問<sup>八十四</sup>に誦譚<sup>八十五</sup>誦<sup>八十六</sup>る<sup>八十七</sup>昔<sup>八十八</sup>問<sup>八十九</sup>の聲<sup>九十</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>九十一</sup>湯問<sup>九十二</sup>に誦譚<sup>九十三</sup>誦<sup>九十四</sup>る<sup>九十五</sup>昔<sup>九十六</sup>問<sup>九十七</sup>の聲<sup>九十八</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>九十九</sup>湯問<sup>一百</sup>に誦譚<sup>一百一</sup>誦<sup>一百二</sup>る<sup>一百三</sup>昔<sup>一百四</sup>問<sup>一百五</sup>の聲<sup>一百六</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>一百七</sup>湯問<sup>一百八</sup>に誦譚<sup>一百九</sup>誦<sup>一百十</sup>る<sup>一百十一</sup>昔<sup>一百十二</sup>問<sup>一百十三</sup>の聲<sup>一百十四</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>一百十五</sup>湯問<sup>一百十六</sup>に誦譚<sup>一百十七</sup>誦<sup>一百十八</sup>る<sup>一百十九</sup>昔<sup>一百二十</sup>問<sup>一百二十一</sup>の聲<sup>一百二十二</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>一百二十三</sup>湯問<sup>一百二十四</sup>に誦譚<sup>一百二十五</sup>誦<sup>一百二十六</sup>る<sup>一百二十七</sup>昔<sup>一百二十八</sup>問<sup>一百二十九</sup>の聲<sup>一百三十</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>一百三十一</sup>湯問<sup>一百三十二</sup>に誦譚<sup>一百三十三</sup>誦<sup>一百三十四</sup>る<sup>一百三十五</sup>昔<sup>一百三十六</sup>問<sup>一百三十七</sup>の聲<sup>一百三十八</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>一百三十九</sup>湯問<sup>一百四十</sup>に誦譚<sup>一百四十一</sup>誦<sup>一百四十二</sup>る<sup>一百四十三</sup>昔<sup>一百四十四</sup>問<sup>一百四十五</sup>の聲<sup>一百四十六</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>一百四十七</sup>湯問<sup>一百四十八</sup>に誦譚<sup>一百四十九</sup>誦<sup>一百五十</sup>る<sup>一百五十一</sup>昔<sup>一百五十二</sup>問<sup>一百五十三</sup>の聲<sup>一百五十四</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>一百五十五</sup>湯問<sup>一百五十六</sup>に誦譚<sup>一百五十七</sup>誦<sup>一百五十八</sup>る<sup>一百五十九</sup>昔<sup>一百六十</sup>問<sup>一百六十一</sup>の聲<sup>一百六十二</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>一百六十三</sup>湯問<sup>一百六十四</sup>に誦譚<sup>一百六十五</sup>誦<sup>一百六十六</sup>る<sup>一百六十七</sup>昔<sup>一百六十八</sup>問<sup>一百六十九</sup>の聲<sup>一百七十</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>一百七十一</sup>湯問<sup>一百七十二</sup>に誦譚<sup>一百七十三</sup>誦<sup>一百七十四</sup>る<sup>一百七十五</sup>昔<sup>一百七十六</sup>問<sup>一百七十七</sup>の聲<sup>一百七十八</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>一百七十九</sup>湯問<sup>一百八十</sup>に誦譚<sup>一百八十一</sup>誦<sup>一百八十二</sup>る<sup>一百八十三</sup>昔<sup>一百八十四</sup>問<sup>一百八十五</sup>の聲<sup>一百八十六</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>一百八十七</sup>湯問<sup>一百八十八</sup>に誦譚<sup>一百八十九</sup>誦<sup>一百九十</sup>る<sup>一百九十一</sup>昔<sup>一百九十二</sup>問<sup>一百九十三</sup>の聲<sup>一百九十四</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>一百九十五</sup>湯問<sup>一百九十六</sup>に誦譚<sup>一百九十七</sup>誦<sup>一百九十八</sup>る<sup>一百九十九</sup>昔<sup>二百</sup>問<sup>二百一</sup>の聲<sup>二百二</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>二百三</sup>湯問<sup>二百四</sup>に誦譚<sup>二百五</sup>誦<sup>二百六</sup>る<sup>二百七</sup>昔<sup>二百八</sup>問<sup>二百九</sup>の聲<sup>二百十</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>二百十一</sup>湯問<sup>二百十二</sup>に誦譚<sup>二百十三</sup>誦<sup>二百十四</sup>る<sup>二百十五</sup>昔<sup>二百十六</sup>問<sup>二百十七</sup>の聲<sup>二百十八</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>二百十九</sup>湯問<sup>二百二十</sup>に誦譚<sup>二百二十一</sup>誦<sup>二百二十二</sup>る<sup>二百二十三</sup>昔<sup>二百二十四</sup>問<sup>二百二十五</sup>の聲<sup>二百二十六</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空行雲もたゞよひぬ」は列子<sup>二百二十七</sup>湯問<sup>二百二十八</sup>に誦譚<sup>二百二十九</sup>誦<sup>二百三十</sup>る<sup>二百三十一</sup>昔<sup>二百三十二</sup>問<sup>二百三十三</sup>の聲<sup>二百三十四</sup>に塵ならぬ心も動く物にぞ有ける。○空

り。詩を云は漢籍を知れる人なれば漢の古事もて答たる着々し。

こよひ浦戸にとまる藤原のときさね橘のすゑひらこと人々おひ来たり

○今夜浦戸に泊」朝の志の如く着れしなり。船の到着を上古は波都言なりと云り。万葉二廿五

に何所にか船泊フナバテ為良武あれの崎傍たみ行し棚無小舟、七十五に近江の海濱八十あり何所にか君之

舟泊草結らむと作り。字典に泊、白各切音薄止也、舟附岸曰泊と見ゆ。又舟を止て一夜居る

（舟をすゑ止て在を疎と云大賦詞）所をも登万理と云り。二十六に大船之泊流登麻里能たゆたひ

に天津辺爾居大船乎云々とあり。十三六丁に近江之海泊八十有八十島之云々かゝるを此頃より後には其泊に

下ハ恋なり。長歌に泊八十有八十島之云々かゝるを此頃より後には其泊に

着をもとまると云其所に一夜居をもとまると云てはつと云言をさく聞えず。和名鈔道路類に唐

韻云泊傍各和名度末利止也と有。常に舟を止る地の名にも成たる物也。とゞまると云は聊差別あ

り。下に云べし。○藤原言実始に餞したる人なり。○橘季衡、橘朝臣は敏達天皇四世孫姓氏録六丁

は五葛城王佐為王に天平八年統紀十二姓賜橘宿禰天平勝宝二年統紀十八正月橘宿禰諸兄賜朝臣姓と有。

葛城王後諸兄と改。季衡系知べからず。此氏人に季通駿河守、其子季綱和泉守あれど縁有にはあ

らじ。此人此に始めて見えたれど大人に親き人なるべし。此二人正月九日にも追来たり。○こと人

々追来たり」按に守の兄弟は鹿兒、崎に來て別られしなり。此二人又他の人々も共に來て浦戸の

泊を訪へるなり。

廿八日うつらとより榜いて、大湊をおふ

○こぎいで」は字典に榜從木、從手、榜字北孟切去声進船也榜人、舟人也。また漕、在到、切

音曹水運、曰漕。玉篇にそかるの字こぐと訓たり。○おふ」とは昨日条に浦戸をさして漕出と

有と同事なり。磯足云、大湊を差て追ふと云べきを略けるなり。扱差て行と云べきを追とは外に

は聞えぬ言なれど船路は追風に任せて行を以把師などの方言に云こと以て書れたるなるべしと云

るぞよかめる。

此間にはやくの守の子山口のちみね酒よきものともて來て舟にいたりゆく／＼飲

くふ

○此間に」は附本其附本其、榜出むと催、間に千峯の來たるなるべし。○はやくの守の子」はやくはと既と

云が如く過去し以前を云り。紀大人より以前の土佐守の子なり。千峯は早く國のさるべき人の娘

の腹に生れて留居たるなるべしと美木云り。○山口、千峯」山口氏は姓氏録卷九和泉皇別に山口朝臣、道

守、朝臣同祖武内宿禰之後也。道守朝臣、八多八代宿禰建内宿禰の子なり之後也。統紀廿八丁に神護景雲元年

九月河内国志紀郡人山口臣犬養等三人賜姓山口朝臣とあり。又廿三に漢山口、宿禰、坂、上大宿禰四

世、孫都賀按黃は賀の誤か上に直、之後也。坂上、大宿禰、出自後漢、靈帝、男延王也。統紀卅八のに

延暦四年六月坂、上云々山口等、忌寸十姓、賜姓、宿禰とあり。何の裔なりけん。千峯父祖知が

たし。此人こゝに始めて出たり。○酒よき物ともて來て舟に入たり」は酒また肴など美味の饌物

を進らせしなり。其を今舟出せんとする所へ持來たれば舟に入たるなり。○ゆく／＼飲くふ」ゆ

く／＼は行乍なり。拾遺集別に流され侍りて後云菅贈大政大臣へ君が住屋外の梢を行々と隠るゝま

廿九日大湊にとまれり

○昨日此に到着て泊られしなり。昨日半途に止て廿九日に着て泊られたるにはあらず。斯て正月八日夜まで十夜此所に泊て辛じて九日に舟出せられたり。

くすしふりはへてとうそ白散酒くはへてもて来たり心さしあるに似たり

○くすし和名鈔工商に説文云鑿作醫和名久治病工也。仏跡碑歌に久須理師波云々と有。省てくすしと云なり。類聚格五十三に謹案去々神龜五年八月九日格云博士者惣三箇国一人医師者毎国

一人者云々上下大略承和十二年太政官符なり。職員令に凡国博士醫師国別各一人其学生ハ大國五十

人上國四十人中國三十人下國二十人医生ハ各減五分一ツとあり。○ふりはへて」は態との意なり。古今春上に、春日野の若菜摘にや白妙の袖振延て人の行らむ。○とうそ白散ビヤクサンは類本飯字と書たるを取貫之登を延てなだらかに云るは女房をによう。延喜典藥式に白散一劑白散歳旦以温酒にとうそほう牡丹ほうたんの例なり。白散をびやくさん喚べし。

服五分云々

一劑トソ治惡氣温疫風邪毒氣云々、本草綱目に屠蘇酒陳延之小品方云此華佗方也以三角、

縫袋盛之シ除夜懸井底元旦取出置酒中シ前シ數シ沸シ學家東向シ從シ少至長次第飲之云々

一家有藥則一里天シ病常是散シ病氣皆消云々）年中行事歌合注二白御説一に屠蘇白散の事弘仁年中に始ら

る。三ケ日の間此事あり。蒿溪翁云、延喜式に屠蘇と白散とを分られたれど此は一種なるべし。

元日の処に白散を風にとられたる事を云てトソの事なしと云れたりとぞ灯に引く。式には温湯を以服すとあるを此承平の比も酒にて飲けるにこそ。以上抄灯に注せるを取つ。（猶元日条に云べし）

○さけくはへて持来たり」此酒は藥漬すべき料なれば加へてと云り。俗に酒マデ添テと云意。念入たる志を感じられたるなり。○心ざし有に似たり」正月九日言実季衡など訪来たるに志有人々なりけりと云れたり。紀大人を尊敬する志の深き由なり。此も其定にて医師は常に親まれたる人ならねば実知らねば志有に似たりと其容子に附て云れしなるべし。上廿四日条に疎からずゆふやうにてと有に同じ也。

天保二辛卯年四月十四日書畢

△十二月廿一日  
より廿九日迄 四十六枚

（別紙）

（六） 任限の事 并更任重任延任の事

続紀一 類聚三代格

（七） 参朝の事

拾芥

（八） 解由の事

（九） 延期の事

（十） 紀大人任土佐守らるゝ事

（十一） 紀氏世系の事

（十二） 紀大人官位の事

- (四) 紀大人年令の事 (五) 紀大人文の上手なる事 (六) 日記の事  
 (七) 諸本校合訂正の事  
 以上十七ヶ条

(表紙裏書)

大野郡灘郷は成田の利の略歟、又稲田の伊の略歟。成田、稲田国々にある地名也

とことはハ常津石ナルヘシ常磐堅磐の略ニハアラシヲトメノとこ

○をのこめのこ 詔詞解二ノ六十四丁ウ本文<sup>五十三ウ初行</sup>五十四オ末行(コレハ親ノコトヲ云テノコトナレハ古<sup>コ</sup>とハ即子也)(上下二対<sup>ナ</sup>奈加ハ)

○あひた<sup>ハ</sup>ま<sup>マ</sup>ほと<sup>ホ</sup>うち<sup>ウ</sup>なか<sup>ナ</sup>

あひたハ彼と是先より後なる其中ほとを云て古くハ波斯とも云又麻<sup>マ</sup>とも保杼<sup>ホ</sup>とも宇知<sup>ウ</sup>とも云なかハ外の反対也

うちとなかとハともに中字を訓て同じ事なから少し差ある詞也<sup>ケナ</sup> 国中<sup>国中ノ中ヲ云</sup>クタチニといふ時ハ其東西南北のウチを云国中クニナカニといふ時其内にある一処を取出る言也

附記

はしがきに述べた本稿表紙の附箋に記された「神楽園」なる人物について、その後高山市郷土館長舟阪琢也氏におたずねしたところ、同市の郷土史家大野政雄氏の御調査によって、それは多分神楽<sup>カサ</sup>(声)園主こと谷屋九兵衛道堅のことであろう。彼なら元高山市長日下部礼一氏の先祖にあたり、田中大秀の門人で、高山の素封家だった人物との御教示を得た。ここに舟阪、大野両氏に対して厚く感謝の意を表する。(長谷川)